



9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 3 4

JAPAN

うつ衣

煙草鏡



振るの繕れ行きて腰よ茶瓶も持て斗室の
床よの湯きとて棚の屏風もよしとよしと
烟草ああとああと今詩酒の三つよまとへりと
寝のえ枕をとふととととととととととととと
行燈を首近へとととととととととととととと
の笠にむらぐと炭団の玉宝を悟り西川ハ抑陰
ちぢ火の光と響ひされと出女のモキセヨハシム
乃軒にゆくと口紅元さとと吸ひるがハシムヒモ
んとおのの經きせるハ舳さむよ角角くと明乃

舊約記

七

つゆりやりせん薺やあくよいでゆあく年うら
ちゆくの病疾よこくもじとくらうひ、七月の
あるあくすり屋跡とみ生くま名にいざるあく川
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

田舎はタヘハ、よみがへ川

よまへん家へもくへと酒あもあ
饅ハサウの先のえのくへ秋まよや
うことゆせふらすあるよ

誰の扇の繪也

山里のつる一つあるあくまで草木の廣い所
自うう外は森ち手に石づか
あれよりはなれを細くあやまふきつといひ谷と
さうして雪どり雪よけ入せせの外遠くへ
かぢりまくらはあつまき山の中とととちひやうへ
似むやく湯中の家ハとつ二十よく物と二倍つ
乃家共つき古市あくとつあくとつれ
女あくあくまくまくまくまくまくまくまくまく
糸引山くじら山のね風も三線よ高とうとくせ満
谷水・脂水のくじらに濁りてきとさく外の山里がみ
り今年、こづて湯入のあくで、いよいよ湯けくよみづく
まくまくくそまくまくせうとふの人いふすく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

さすに立ち止まつておひるのあゆの名
橋をとひてにさくのやうにかづく方せう襷一き
そぞこにみれりへく 亂ひまくす

萬葉集

月の日
湯山やみきにさす染ゆる

莫希ハ湯にゆづく秋の様也

山の上に草原すと
之岳幸と名づけ
固縁あらむるは
こいもよアテシモ
傳シテ
明か
堂せれ男のみ
序ふす
う

まや
利ぬあひよ若柳

つむくやまくさくあするはとくらみさうけよ大不と
名にえりあ

交游

吉游や假りに立向まつりあひ

うふふふあやせ火あゝ人の亡魂トシヒツヨ
トシヒツヨ

我名ナツミノネナカニモアリテ
リハタマシタムニシテハシタムニ

あまごといふ魚とすとさくへもあまう中よ
うにゆれもひ赤るる樹といふよすけ傍あ
トある家哉ちとさくて浦さまさくさくつさく
あめりさく四枚せり二四くまくさくうる日ハ雨よ
あま

湯けむりか
秋の雨
年をもよおす
年をもよおす

亦有志焉之餘以贊

滌治の月夜は河にありて、うらは草よぢ
きもづきまどりと一ツの河にあくまじハ雲を産のあす
洞は草中に待テニ二夜
もうつるはまのちを壁に里れ某うかくいへむるあす

得失圖株人辭

朱研の本由と新株人雅伯子
謝る。詩よ仕ふ

せよハサ戸垣のうちもさへとちよふあらぬともう
まつもよぢゆうあくと遠き清奥のくわんちゆう
かくすり一句を添くものをあるよ さてやうち
びを添くあらわすよ さすよはれあん我
あくまくへんめんやくよほせり 風あふるよとて
きのよふ名づけ駿馬島唐主の行りとやうのあいの
まし病たりある序、我名わく一のふるよふ俳門

乃ちあうとてあせのアトとさわれと我及みけり
公入をとどく草門の人とすけむる十手お舊相知の
うへざるうさく、我あつてもうるものうへふる
うへきはのいとひをゆく、伊の神にくらむる
あくよ遠きあいの高熱ととくすのふの心地もす

あき厭にまかやちア石

リヤ、みあきのきげつキハ松の烟の風起
とあとえきの朱波ユハ定めせとすてうへ毒ま
はちく風終おちまつもとされと

朱波にまつも染ぢし奈れサ

芭蕉の芭蕉の芭蕉と云ふに絶え狀ぞ引る
中は奥羽ハ行旅のゆゑて奥の
細々の絆あわすの句ハ今の耳口ニ残す
と雄鳥が聲やあくもあくもと歌うる聲ひ
ちひもうかと一之のうすとてりぬの千葉
うみハふくらむあくもみのうのはくほじされ
解因の一音とぞくと一句ハよし人にありと
告ぐる

も川や暮にこくおも秋の風

一色亭記

豆州熱海子寓居の時渡をまかうと
お求ようく詔

所ニ浴詠——くらむと紙の——浴せの音子があ
新ひの人の羽あくまづけあくまづ湯を二月も

のやうりらうすあひとさへ我をもれ母らにあらひ
まつせてオのよあゆる旅。森ちうじ舊ノ柯幸の新
きわく疝氣の腰を溫泉に浴し、ほせぬ耳を洞みに
浴ふされつけ里れ地獄に山うみ海へかゝり
はうすによく月の床まに枕を支へて鹿の
まえ巴峠の檜のまうり兩のつむぎと盃とくれば鰐の
利刃ねの鱗と耻を伊豆の行山すみを経、ほぐる
の口の山移りより紀傍正のま眺くや裡とあくま
寺へく回遊をくづす沖の小島ハ朝夕にうれそとあれ
大島のゆく波浪の下り雲時々おそれ音こゑりて
あきどんのうきかみとえのま眺
あらの目とうちこらへ中よ波音と底某の亭よきよき
うとうと種はまくらむ後文、山こよまくらつて
二字の歌よきとあらぢう一色亭の名による、
滕王閣の趙ちうとや霞孤聳と齊く船いよ
長天と共ある波の秋も今にとく浦のみよ千端
よさうるうあらかじあるあまの底のよすとせんじてや
うちう人もうとせよ生やううとくすみをきる
つありてせきよみ汗よ浦の舟

乞食賛

かとう小町の里すあはれ猿狹のやう

すもあらじあらうとあはせんへ厨子の肥肉と遙かに
仁政聖きのよせにてへへほくしれとあはせん
ひと飽瀧の恩澤と省て報國の志をうながす
まじめじちく泣せむゆくれとくもうれとえかれどもか
まは花よ一盃のやうへほりやうへきに飯汁の香
やじへきをやうへり世の人心解きのうへよゆ
つまて猿のよれ及ひゆくにのうへんとあら佛と
香華よまわくくよのそ金れ肌を美びうへ
よしうれと起立に詠く萬一枚とあはせん
トまわくゆくよ画贊と

ひまとみの月とと勢因渴よ水よひうきに行
あらまくせ事よ多きもとくくくに巨
細舞しもまつたり。つと斗酒ハナリよア坡翁
うゑのキミドリに酒をある間も漕舟がれく重
あき月の満つてのちをとてうひや早崎のふる
月みづくは峰あらんとや其のあら遊ぶにあ乃
みとめ成秀う門敵タフと、ひくかの山
とある峰縁の淡松風の里波のよすよすよ
もう西湖の湖の松風もよすよすよすよすよ
湖よすよすよすよすよすよすよすよすよすよ
よすよすよすよすよすよすよすよすよすよすよ
よすよすよすよすよすよすよすよすよすよすよ

寂しみにこそ例の唐うらのつむぎに立たぬ
袂とゆふとく又一盃とあはせりとて白雲山乃
緒れきのちうくもううすをそぞりる
叶づまれ名にひともの有るや

蝶翁詩

蝶翁の生はとも悪くもひの家をよみがえりてよ
のうれとももと家をすすめりてよくおびけとる谷と
ゆゑりあらじよく穴をとむ掩すすめりてよく
走り人を免めすすめりて是とれうあ解す
く一つとすすめりてよくとてこよめあう詩つ坐
御侍御とくく仰仰謝詔れくねにゆかわせりや我
むらゆすとてどうう博ゑとて名のりるやぞ
う今はうち方のりとまうてゆくあせらせむすと
ふうじん人の詩をいりゆきとくをゆくもほくくの
つみよもよはよくとくよくとくわ後
とくへくとく我ハ笑ひとせぐるありくと
ひつよくとく人のとくのよしとくわよしとく

三四月堂記

磨大吉撰成就院書

はれわれも死も一生の事とあれど
は死下りて行ゆる事の多くと見て其事
あきれさるハシム事には一句の言ひしんに於く
物のよたりの云濃のねむけすく出生の歎を六浦
のうちちよ念へりすき名うりあらと
すれども月よりきて眼をすませに
も昔ぞ一とひなまよ人のあはてよもとあらう
へきさうとあまきのあーれあるととて改え
堂ニ名つゆく此句れぞりやまてうけ
雲上の厚すみ底の魚もうと遊ふす絶とく
かしてあらばまよ一えいと二が因ハ古あれて
はがれ青葉の濃碧絶あるぬうけハ世へうすすく
徳のよき廢つどもつゝの

翁像贊

多は方せのゆゑひけく空は枝せむまよありま
捨のゆひの空あらゆくと見知のせむあら

翁曲詠

今後郎詠とソラむくは遊ひの空とよやき色の
儀る聲すとよすれ我つよきくもゆくわくとも
幸あら家くとよすれのよすれのよすれのよすれのよすれ
とてえき人のよすれとてニえとすへとよすれ

懐旧覽古の情すく謡のやうづくすあまひ
まきめり老とくは人のよしとくとく独居らり
うきこりりとむよハ生とくこの友の一つよハうりぬ
へれとてみ手絃よあくぬ一面乃尾色を抱りく西
の月内の女友務の傍に撥あくちは人へて平家を
かすやうく我ハひとに老臣の愁古をなる
とあくされの江戸屋と母とみ祖父ようつてゆ
とあくきゑ筋あくり撥面に三りもく乃自
さく出く桐井一美れ教ふれとお系とくよるゆき
れよさくいわじ向ひつとこすまよ

膝瘦く床屋のあつきや秋の苦

卷四十一

市中をあそび遠づき、杖疎子繩とひく渴と賜る
足と勞せば年半もく遅くのを家庭に栓とまつて
蓋と末と年聲あくこよみのゆと求く聊捨を容る
乃幽居をりとよじよみ思はるからん我せ
あはくとくすまくハ花やあひの岡あく日
きとよあれて老の春としよとくとく人われせ
ざるうりりつゝの山花のうのうとほくと風
さすをき二種のふと拂つてよ汲へき山の井よ
け牛と井戸ひくとくとくのうくとあれあくら
タうかね少家うちあを栓よ鶴れ曉と告げあく
ともくのたひ声とくひくととせりとせりとすあく

門を出ぐ東北の方をもぐく十歩の所を曳りて指
万葉の山横むれ眼下千町の田つちや村落畫圖
乃中す入る南からくるの森林もくよ海の浦風りよ
もや勢い浮うるるのとて又はえあめ日も夕う
やく強き氣れぬせうる細りくあうつ声虫の鳴うよ
うハアキハ地ちるハおきの里す近づふもあ
年うれ年うれ垣の林へ走りゆく石塁を追
あくすりのよきせれまよハ一ヨニタシテ御ゆるを
さしたに片手をひくわく名前をかきとすと
すうの鶴氏、毒鳥とも呼ぶとけり黄門のあらす
追うすよこれ穴居ス仰ぐれとあアヤマ病の老母
経すがいと我ハ知れまじて勤めどつまむと廻遊の旅已
あやせとうと人へりさん。

百魚譜

人ハ武士較ハ捨の手魚ハ網とくみ立りせの人乃口
ヨリもとよりあるくあるやもせん、あれともけ魚と
きて調味の魚とてとしよ咎あへうと余うりく甚
み居る男アリと外す仰ぐくもアリ、ちうるぞうう
ヨハリヨリとてうこうに當飯の油漬もゆく度生よま
うる仙人もあり、あれと夷之和多モ化の差者者、
同もしけとく生とてと約也、これとく私と鑄の司
といよハ食味をきわてる御座ひとくさハリと料だ

せんと学ひる人ハむし愚ちるヲモトム

ト

移門法のうさんとする多きくあらけゆくも大聖
の法すみしけをかくセテ御世の事ハの調子
並もひとすうれりする幸ふゝあらじ味い義うると
いへる飼の料やのみらうるよへるへくまき。乾物
タマヒテアレ飼清汁をまきによう一とすくまき。蒲鉾
ヨウヒツク塔より飼を調ひ是れかあつやまと
まるはあ能を恥といひそと申らるまれとぞつる丑や昔
平家子忍チ兵未景清と名ふと今氏のヨハ泣子をも
威をへく胡比京并ます肩をあまへとすあらん記
紙の上りて人まづ虎の外にささら動る。トシ
ニ帝主おもてかみをひあすつうち侍あり。トシ世ヨ
名れこくしキミをある人評。トシのありあ
トシ七宗。其ある

わんの石を我胡子をあす。張氏ハ生と私風
ざりと仕達と辞。平家ハ生と船中よほく官壁
進止近退いつれをうやじて。

納ハ近止。洞庭の水をくく。鯉ニ仰く。位階却
きり名年ハ多き。彼うき。れと飼ハまよ。室。故ゆ
あら)

飼ハ前令のけり。もやられ極候。もうとせに。す
轉ひ初秋に程。ゆく空せの蓮のうに。ゆく。後生
差處の來。す。のす。

鮮ハ芥子郎の風味上戸ハ千金かくもレタシ
さ謹念せばよき事也と善くめぐらしにさるナム
ロホト 鮮肴とすゞくあふ鶏のやまとそらわを
まの精モアラモトと名の通とぞくせんにち

毎晩の唐の如く子細らゝさまづり カミツキ
ノリササ付う料をひきうちかけにちうて
轆ふううと二のけの大やうて搦手ハラ手をうけり
カク、又字のひまは壁の上に轆ハラとせ
のひま中の轆よ二つに轆をやまをひえ
轆ハ越後よ名あく其四のまもむけをひえ入よ
轆とくすみのまもむけをひえ入よ
狭歩頭ハラ山の下ハラ、轆とくすみのまも
非情ハラさうこれ、非情のまもむけをひえ入よ
せに益々轆ハラて詰ハラまし

牡丹ハ花の一株トテ皆セラウル物極ムホダ万葩と東
シテアリセテムニテアリ勝生アリシ芳モアリトメアリ
シテ冥考の論ヨハ及セス白魚トシナガルセシニカド
モヤナギハクノ朝鰐の大魚ヨヒキルモタシシテ鶴鷺
の御トキモトキアリシテ四俗ホトキノ足ヨチカモト
キアリモチカモトアリシテアリシテアリシテアリシテ
モチ菊トモモチ翠トモシソクモモチ魚トモナツモ
トモナツモトモナツモトモナツモトモナツモトモナツ

寺猫とも寺裏ともいふ事あらず
多く物主の侍士もしくは兵士なり
縄、新川の筋次に賣られ給ひての事
らる比目魚、正色と裏表とある。油漬け
先づゆ

歯はもまのの忘わいの骨はりのおこそれも
胸むねのあきよハまくふる

うよ 城のアセハをよアセと
の城をよはえさうり力とも使ふと一体のロコハ
ちくられあくすやまの法原の木の果て
えくすくとよくすくと
てきをひの枝葉
つるてちると石あと
せよいすくりがくらをむを益あきこ石とす
ロコハモヤシ

卷之二十一

瀧ハシヒ御比乃面白也ちくと黒六砧に妙多幸
之あらに候よき人ハナミヨリ新薦喜以爲りあと
あやうれくうやまきはあらん

今
ま
ん
と
か
く
は
う
そ
う
す
か
一

絆とふ生と死とあつて、あくまでもきのうはときを
てあやまき毒をかうりきるのまへと毒のせう

まことに人をもとめしりん人と
きく別よし

餉ともかの、嘗てこゝにあつても嵐山のすと
玉と縛ゆきと多きをよどむ。さて巖ハ
田畠のそとあると、門と寺と天下の鬼
を防ぐを効解餉才乃へ

あれども人へもまた四季と魚と四時の飲
薬並一俳人萬々魚と品飲とする、かづらゝ嘗て
嘗て飲を捨てぬあり。あれどもうみハ年月のやまと
とまく食は世界なり。とてとまくに仰られと
うの食ふべきう茅とからしとよもく茅の毛ア
都下の御殿にと人のうびなるさみき記
きくわい

案山子辞

やまとせうかくのいよま萩と山田の畔ア
ひくとくのそーあとあれどもいよま萩の落葉
さるの口さくふくとひくは春田、万年よ柳のそ
とまくに民家ハ学強と雲ア、よりこそ新政ハ
とぞりの外氏名士ア、ら氣功あるとがよの聲を
あくとせた名をア、りちやあやの竹よ絶ぢ
てがくちあくまうの歌をうそ、我坐とあまじんと
まや案山子正よこくよひまうねま矣

於時とあはれ事の弓矢を

と歌ふてあはれとす事よわざいとゆく汝ノ
ニヨシハ又ミムドトヘビヒトモトヒキと詩リや
蓋をきりやまぬれぬよハアシテヒヒキハ
キハトモトヒムル

生れあれハ蓋をのひれも
あはれりか一あはれも

糸瓜辞

むくつけさしりきとと伏拂れや
花ハヨリタクハれんまきておもつとひのへう
まくはまくとらまくはけあにかてあつらくこぢり乃
料をばづり生れてわらう「於」とやく
俳諧歌アリウヒトシカシタハ這セラウテ
その味ひの豆あゆと特サキモモを残してからん
坊主みくらゆと隣の人とすとろす
またのびとまけ糸瓜うね
根えいきに病氣の薬すくめてこすにじる乃
あらうとまくあらむむくあれ邊にまく
楊柳枝音のまいふはくせ栗柄せん相子すま
きこちきあくのふとくあられつ白鶴めうよ
みハ医者の事ある事あらむへーこれももとす
すすきすれてもとある人をあゆる

塔よ金らまきへあき もあらむ

而蟲譜

蛙ハ古ノ事序にうきよくようすよみの経よどぶれ
て幸あれ翁月あれ風もうぢく遙くゆるハ
トト古也よ歌ふくらゐの向さまへんせばゆるハ
トト

初うつともソラキとまくにけねうり初きみ少
リテシテ大きちあひのうありやくと云ふゾノキ
スルトキアリハ、翁の一匁よそりとモー^ト
カクハ、一トキ、のみあくまわの上あリ一トキ
トモシミニモテ、角の下るハ、このものたゞやと
まくをさむあくまに貪の学者、トモカク油火の代
セナカク、けめ、をまよあらざる、一トキ、まよ堂ゆ
トモサセモハ、外のあ自由アリ俳諧、ハ、まよあ似
キヘン。

日ノリ、ハ、多キ、ヤ、ミ、ス、署、タ、ミ、ホ、持、ニ、
タ、ハ、羊、ニ、禿、ト、サ、ホ、レ、シ、ケ、イ、ト、モ、サ、
モ、ト、正、ト、モ、ソ、シ、筋、壁、の、人、の、禿、ニ、
此、事、ニ、五、ア、シ、ト、世、の、説、ニ、ア、シ、
黒、ニ、叫、サ、モ、ホ、ル、ヘ、ン、

蜘蛛、ハ、シ、ミ、ノ、纲、を、む、ろ、ん、く、い、シ、ミ、ト、く、あ、と、害
虫、と、を、ほ、う、れ、乃、も、よ、う、き、ス、ハ、退、漫、の、媒、ト、
ち、う、と、れ、と、り、く、よ、奸、賊、の、心、ト、く、い、と、か、く、一、古、代
新、敵、の、心、ト、あ、く、未、完、を、ま、く、あ、い、シ、ト、く、る、り、
あ、く、レ、一、サ、ヒ、一、座、室、サ、若、者、の、軒、サ、壁、の、羽、あ、
ト、シ、捨、テ、リ、シ、ミ、ト、ア、レ、シ、ト、わ、も、ん、く、か、れ、が、
く、く、モ、集、ツ、く、く、く、く、く、あ、れ、东、洋、を、よ、う、
ち、ひ、く、る、山、あ、一、者、と、は、様、ト、ハ、ソ、く、ソ、や、う、
芋、虫、ハ、接、く、ら、む、の、に、ト、
ア、号、ト、シ、脊、じ、一、キ、モ、ト、ハ、名、の、ニ、く、生、

かに沙ひーとよぶ虫にありとふくまむどく
あくとまうる

蟬乃せ涯ハ世のあは終り少くもーハアトモーにいれ蓼
カヒテシヤハ蝶ハシキシキニヒレ蓼
ケレハシキシキニ詩トアホイサハ俳諧也
まと俳諧を人のくしわもあるー

あす家の名によみかく五ひーやまくま
虫ハリ

蟬ハ歌ふれよりそーせのりとあみよ深あきへよハ
似たり東西よ聚散ー耳を求くやすといつ、槐安
の都をのれくよのカの安きゆとほじらむ
傳川歐門氏は猿といひみど千ばの塔宮廟をへて
狗の鳴た鳴く身うらまくうして猿の毛にさ
らゝ風ふのりまくさくつるー

風と千千子歌音と呼ふよ油瓶ハ桜余とらうよ
桜余ノ吳名多くやウラクノミタ多くや生食食
あく

蝸牛ハ只多くとまきめりとまきに草すらん實
持ふとよゆく生と貞とあくへあくの安き
事す竹

地垣外の里かくとあくへくは塔松とさむ
のねぬきハ前用のすまう
塙垣の瘦くとすとするふ一ううまむ

うあく人の、一月の間いわす。

解の事あつよ、トキヘキアリ、あれ、ホトトギス
をかくしの、黒と詠ゆくよ、

すすむにあらわすてりてく名とせ
るあらん毛生いひくつさき虫よし國
松そ枝一木よしとま一在ふよすうのハミホアリて
いはり、ほせをねいひく、殺生をすすんで
松むけのまへある——

まくらの上のやうな寝をぢ
産てまじ虫ハ其の上にあたへうと蓑
虫がえりと呼ハゆふの事とぞよぶねとされ少
父のむかし母とおひはなめん

せぬよし、ひづき、恨み、さくらの伊月のは端がまく
さくらアモリ、あくろにまく、じよ、も月の
比ちく、あくのこう、くる、はさみ、さくらもあく、なを
約する家のさくらせやう、焼黒す、烟う、かつ、風扇つ
る、さくらもあわう、葉は、強てちかく、きとろの七賢
のお山、お山よ、園の深ちく、うむ

ひり 銀子枕のいせき 行持はせまうと残葉
とまくといがみふとまく 佐四ノ辻とあくと園
およきし能得ふひとく ほのめいある史よりある
うるを、びくとも月にうれぐ、すすりのれの氣とまく
あらかみぬいよもと晴らんとまくちんくあれ

此の續を而ハセラ有ツアの寛保の年ホトウ
寛文屢のノリテ先のはまくの後稿をみて

抄出也

末傳 二林

百人一首 古今狂歌袋 宿屋飯盛撰
古今の像并自詠

卷一冊

五人一首 東都曲狂歌文庫 宿屋飯盛撰
尚時名の像

卷一冊

狂歌鶴 鹤都部真頬撰
絃家の秀才であつし

中本全一冊

不死仙家長壽臺 四方山人集

卷五冊

狂歌才若集 四季春之詩 南畠先生撰
江戸名所 春興の詩

全一冊

東風詩草 四方大人撰
四方先生著

全二冊

狂歌才若集 四季春之詩 南畠先生撰
江戸名所 春興の詩

全二冊

通詩選七言古 四方先生著
四方先生著と字を附す

中本全一冊

狂歌故混馬鹿集 朱樂漢江撰
狂歌のよもやまと死

全二冊

狂歌濱の三行ど 狂歌のよもやまと死

小本全一冊

狂歌新玉集 四方山人撰
年の居りゆゑとわづ

全一冊

狂歌百鬼夜狂 四方山人出序
名人等百物狂狂

全一冊

同 諺解 同作
上のとく奥多欠本

中本全一冊

同 笑知 同作
上のとく奥多欠本

中本全一冊

